

橋脚を洗う白波浅き春 壱舟



仙台城址にある長沼の蠟梅が今年も開き始めて、春が近くなりました。例年にない暑い夏と寒い冬でしたが、さて、今年の桜はどうか。いい方に期待が膨らみます。

支部の環境に若干変化があります。4月以降、みつわ会コーナーは「日新火災インシュアランスサービス(株)」の事務所の拡張に伴い現在の場所は利用できません。だとしても、悲観的にならないでいい方向に知恵を絞りたいと思います。

3月の行事

	支 部	みちのく損保
3月 2日(水)		料理教室
10日(木)	幹事会 4時～コーナー※	
12日(土)		マーじゃん決勝大会
16日(水)		三役部長会
24日(木)	例会「しゃぶ禅」12時※	

※出席の連絡を18日(金)までに友彦さん(379-5287)、または業務部伊藤さん(227-2131)にお願い。

※議 題

①4月以降のコーナー廃止に伴う諸問題(幹事会、支部便りの発送事務、会計諸務、他)

みつわ会コーナーは廃止、代わりに現在の喫煙室に事務用にデスクを一つ置く旨の会社からの提案はあります。今後の在り方については、会社側と支部三役とでも具体的に打合せの上今回の幹事会で検討したいと思います。良い案があれば再度相談になりますが、会社の業容拡大に伴う事柄であるので、基本的には会社の都合に合わせたいと考えます。

尚、この件については、みつわ会本部を通じて支部長宛てに連絡があったもので、本部としても承知しているものと思われま。

②新年度役員

2年任期の支部長交代の時期です。立候補があれば幹事会に申し出て下さい。前記の件も併せて前向き姿勢で検討願ひ度。

③23年度支部総会の下打合せ

早くも、会場、アトラクション等準備段階にきております。



白井さんの人物往来(続3) 星利夫

予備士官学校時代に特に印象に残ったものは、T区隊長の訓示でした。「弾は前から来るばかりではない。後ろからも飛んで来る。」及び、「肉体が限界に達したとき、一難去って九十九難あり。」の二つでした。鮮明に脳裏に刻み込まれ、その後の軍人生活そして除隊後の一般社会人時代を通して、度々起死回生の転機を得ることができました。

予備士官学校の同期生の仲間には、東北のみならず、第7師団北海道部隊からの配属もあり、卒業後の転属命令は、原隊復帰、あるいは新任地へと3分の2が外地(戦地)、3分の1が内地であり、戦局ただならない当時、運命の分かれ目ともいえるものでした。

その中に、奇しくも戦後お会いして久闊を叙し得た人もおりましたが、中には戦死などにより消息不明者が大部分でした。

予備士官学校を卒業して、原隊復帰となり、白井曹長は、所属16部隊が、盛岡から秋田に移動していたため、列車による赴任となりました。はからずも仙台より1等車借り切りの1台という特別列車で、途中故郷の北上駅で30分の停車の間、御両親や近所の知人等多くの人々と交歓し得た破格の待遇でした。

秋田着任後の初の正月を迎えて、昭和19年の軍務生活が始まり、冬期演

習、新兵教育(すき一部隊)、週番勤務が日課となりました。

前後しますが、冒頭に触れた日米戦争の状況に悪化の兆しが見えるようになったのは、ミッドウエー海戦での惨敗を契機とする南方作戦の齟齬に由来するのでしょうか。ガダルカナル島の激戦は、昭和17年(1942年)8月8日にガタルカナルガナル島の空軍基地としての重要性に気付いた米軍の攻撃が、全力を挙げた本格的上陸作戦で、これに対する日本軍は、当初飛行場建設を命じられた海兵施設隊のみであり、たちまち駆逐されてしまい、7分どうり日本軍によりできていた飛行場は、米軍のブルドーザーによりあっと云う間に完成。戦闘機部隊が続々と飛来し米軍の一大基地となるに及んで、初め偵察的上陸と判断していた日本軍も、超強力な部隊と解り、その奪還に総力を挙げることになりました。が、制空権は完全に米軍にあり、日本艦艇が接近すれば次々に空からの攻撃で撃沈され苦しい戦いが始まったのです。この5カ月に及ぶ争奪戦は、天皇陛下臨席の御前会議でのガ島からの撤退が議せられて、終結を見たのは、昭和18年2月9日に最後の兵を撤退させた後の大本営発表でした。ガ島よりの撤退は、米軍の制空権が大幅に拡大し、日本陸軍が点在確保の南方戦線の島嶼のみならず爆撃機の航続距離が短縮されたが故に日本本土への空襲が格段に容易になった

ことを意味します。大本営発表及び戦時情報管制にあった放送・新聞等のマスコミには、その目的を達して、転進と強調していますが、これより南方戦線に於いて目的未達と撤退が相次ぐ日本軍の後退が始まります。

米軍は、昭和18年(1943)末より19年にかけて、大機動部隊を編成し、計16隻の航空母艦を中心とする軍団が、フィリピンを目指して先ず強襲したのがサイパンでした。昭和19年6月19日、日本の連合艦隊は、主力の航空母艦9隻の総力を挙げて、米軍15隻の空母との決戦に挑みま

した。日本軍の空母3隻が撃沈され、航空機395機のほとんどが全滅しました。惨憺たる日本海軍の敗北です。続いて7月7日サイパン島が玉砕しました。



昭和18年の1月14日モロッコのカサブランカでアメリカのルーズベルトとイギリスのチャーチルが会談をして、日独伊は、無条件降伏以外、戦争をやめることが出来ないと宣言するほど戦況は、米英連合国の優勢に傾いておりました。ヨーロッパ戦線におけるドイツ軍も連合軍に押しま

くられ敗退に次ぐ敗退の情勢にありました。

昭和18年の末頃インドの主要都市インパール攻略作戦と云う起死回生を目論むビルマ方面軍の無謀な作

戦が立てられ、昭和19年3月にその火蓋が切られましたが、4月末には日本軍の戦力が40%前後に低下し5月には参謀本部も撤退命令を出さざるをえませんでした。

昭和19年4月1日、秋田勤務の白井曹長は、幡12161部隊(電信25連隊盛岡)に航空通信士官要員として転属となりました。久しぶりの盛岡で、電線や電柱の敷設訓練、架設訓練そして無線通信演習が終了した後、昭和19年7月1日、少尉任官となりました。

第1次任官の同僚約10名は台湾

に出征しております。白井少尉は、士官となれば営外居住で、当時閑静な住宅街、盛岡の菜園に下宿をしていましたが、或る日道で会われた女性が生涯の伴侶として相応

しいと心に決め、直接御自宅訪問の上、ご本人、ご両親の御承諾を得て、目出度く8月の電撃結婚となったこのことです。そして翌月、9月1日には、師579部隊航空通信隊(新潟県高田)に転属。高田の第1中隊に配属となり教官を命ぜられました。着任は単身でした。高田航空通信隊勤務より終戦まで、そして戦後日本の激動期における白井少尉の波乱万丈記は、次回とします。

新年号の4ページ最後から8行目、「将校行李が・・・・真に圧巻でした」の箇所は「将校行李が渡された後、800名が将校服を着装しての検査は見事なものであった」に訂正しお詫び申し上げます。

巷に漫画と外国語が溢れる今日ですが、昔の日本語と文の調子の美しさを再認識することがあります。目にとまった「2題」、一つは斎藤孝さん著「声に出し読みたい日本語」から、二つ目は内田康夫さんの「志摩半島殺人事件」！から。

「震災」 永井荷風

今の世のわかき人々 われにな問ひそ今の世と
また来る時代の芸術を。
われは明治の児ならずや。
その文化歴史となりて葬られし時 わが青春の夢も
また消えにけり。
団菊はしをれて桜癡は散りにき。
一葉落ちて紅葉は枯れ 緑雨の声も亦絶えたりき。
円朝も去れり 紫朝も去れり。
わが感激の泉とくに枯れたり。
われは明治の児なりけり。
或る年大地俄にゆらめき 火は都を燬きぬ。
柳村先生既になく 鷗外漁史も亦姿をかくしぬ。
江戸文化の名残烟となりぬ。
明治の文化また灰とはなりぬ。
今の世のわかき人々 我にな語りそ今の世と また
来む時代の芸術を。
くもりし眼鏡ふくとも われ今何をか見得べき。
われは明治の児ならずや。

「声に出して読みたい日本語」から

「安乗の稚児」 伊良子清白

志摩のはて安乗の小村 早手風岩をどよもし
柳道木々を根こじて 虚空飛ぶ断れの細葉
水底の泥を逆上げ かきにごす海の病
そそり立つ波の大鋸 過げとこそ船をまつらめ
とある家に飯蒸かえり 男もあらず女も出で行きて
稚児ひとり子籠に座り ほほえみて海に対へり
荒壁の小家一村 反響する心と心
稚児ひとり恐怖をしらず ほほえみて海に対へり
いみじくも貴き景色 今もなほ胸にぞ踊る
少くして人と行きたる 志摩のはて安乗の小村

「志摩半島殺人事件」から